

I'm here. 2006 —リアルはどこだ—

会場Ⅱ せんだいメディアアテーク 6F ギャラリー 4200b
 会期Ⅱ 二〇〇六年九月二三日「金」〜九月二七日「水」
 主催Ⅱ 卒業生支援センター
 企画Ⅱ 美術館大学構想室
 協力Ⅱ 東北芸術工科大学校友会、せんだいメディアアテーク、仙台美術学院
 参加アーティストⅡ 岩本あきかず、小林和彦、鈴木伸、橋本大祐、坂田啓一郎



●ギャラリートーク

『リアルはどこだ』

パネリストⅡ 出展アーティスト+山崎環(NPO法人リブジ代表) + 宮本武典(本学学芸員/司会)
 日時Ⅱ 九月二三日「土」二四時三〇分〜二六時

●I'm here 2006 開催記念ダンスパフォーマンス
 『カフカ・掬の門』

舞踏Ⅱ 森繁哉(舞踏家/本学教授)
 日時Ⅱ 九月二三日「土」一六時三〇分〜一七時

<p>展示会レポート</p> <p>『I'm here. 2006 —リアルはどこだ—』</p> <p>「芸術≒生活」から生まれるリアリティー</p>
<p>宮本武典</p>

二〇〇六年に開学一五周年を迎えた東北芸術工科大学は、既に五千人の卒業生を社会に送り出している。当然のことながら、彼女らのすべてが、クリエイターの道を志向するわけではないが、アートやデザインを学んだことを、各々のライフスタイルに上手に取り入れることで、日々の暮らしを精神的に豊かにしてくれれば充分だ。人間らしい生活と、芸術は等価である。

しかしながら、心の中では「二五年経った。さあ、ホンモノのアートリストはどこにいる」と声高に、アートの賭ける卒業生たちの活躍を求めたい想いがある。洋の東西を問わずアートシーンは、ギャラ

リスト、編集者、評論家、学芸員、コレクターといった人々の、まだ見ぬ才能への「愛」にも似た所有欲の発動によって支えられている。東北で学んだ五千人の中に、新しいクリエイションへの待望熱に呼応する若者は存在しているのか? 『I'm here』とは、こうした「まなざし」を意識しつつ、それぞれのフィールドで懸命に制作を続ける芸工大出身のアーティストを発掘し、その人と作品を紹介していく展示会シリーズである。

大学で彫刻とイラストレーションを学んだ岩本あきかずは、現在、家族を介護しながら絵を描く日常生活を過ごしている。「精神のバランスをとるため」に、枕元で描くという絵画は、一見、柔らかなパステルカラーに彩られているが、そこに描かれるハイブリットな生物やシェイプの、「脱皮」的な連なりは、見る者にイメージの不穏な転調を予感させる。

橋本大祐は、PICSに所属し、テレビ業界で多くのスポットアニメーションを手がける映像ディレクターである。多くのクライアントからの要求をこなす毎日に心身ともに疲弊すると、仕事としての映像制作からの逸脱として、自動筆記的なドローイングを楽しむと

いう。二〇〇五年の文化庁メディア芸術祭で優秀賞を受賞したCG作品『Floweth』は、そうした密やかな逸脱行為から生まれたアート作品だった。滲みとともに発生と消滅を繰り返す有機的な色相は、リリカルで美しい。

小林和彦の映像や写真は、山形・東京間の新幹線の車窓や、歩行の記録を素材に制作される。その作品に共通する円環構造は、都市を「移動」する際の呼吸や心音のリズムをリアルに感じさせる。私たちの身体の中にある「都市の生理」を発見させるスコープである。

鈴木伸は、金属工芸を学んだ後、現在は東京藝術大学で空間デザインを学ぶ。神奈川出身の鈴木にとって、山形での大学生活は空間把握のスケールを根本的に変えてしまったという。切り裂いた化繊布に「東京」の映像を投影したインスタレーションは、都市のノイズに浸されつつも懸命に適応しようとする鈴木自身の身体感覚の、疑似体験装置として制作されていた。

坂田啓一郎には、職人的な木彫作家という印象を持っていたが、今回、マケットとともに展示された制作メモを見て、そこに神秘主義的な言葉や数列がびっしりと書き付けられているのに驚いた。彫

刻のスケールや、「彫る」行為に、何か宿命的な裏付けを求める自問自答の過程が、その彫刻の鋭角な先端に表れている。

今回、招聘した五人のアーティストは、それぞれが置かれている個人的な状況や環境と「折り合いをつける」ために、制作を継続させているように思えた。こうしたオブセッションな制作態度は、「若さ」によるものか、それとも、アーティストに求められる、近代以降かわらない、ある種の社会的要請によるものなのか。いずれにせよ、彼らの表現から浮かび上がってくる社会へのリアクションや、切羽詰まった感情の表出に、無条件に共感を覚える。そこには、私たち自身の「生の現実」が投影されているからだ。彼らは、アーティストになるために、作品をつくっているわけではない。この展示会における、いや、アートにおける「リアル」とは、そういうコントロール不能な「生きる」と「表現すること」の愛憎関係から発生してくるのだ。

(二〇〇五年・二〇〇六年「I'm here」キュレーター/美術館大学構想室学芸員)



坂田啓一郎 Keiichiro Sakata

1973 兵庫県生まれ / 1998 東北芸術工科大学芸術工学研究科修了 / 1997 「彫刻三人展」ギャラリーせいはう(東京) / 1999 「彫刻五人展」県民ギャラリー(宮城) / 2002 「彫刻の現況展」東北芸術工科大学(山形)、「DONO D'AMICIA」Rapalano Terme (Siena)、「白石野外彫刻展」白石市(宮城) / 2003 「昭和会展」日動画廊(東京) / 2006 「宮崎国際現代彫刻・空港展」宮崎空港(宮崎)

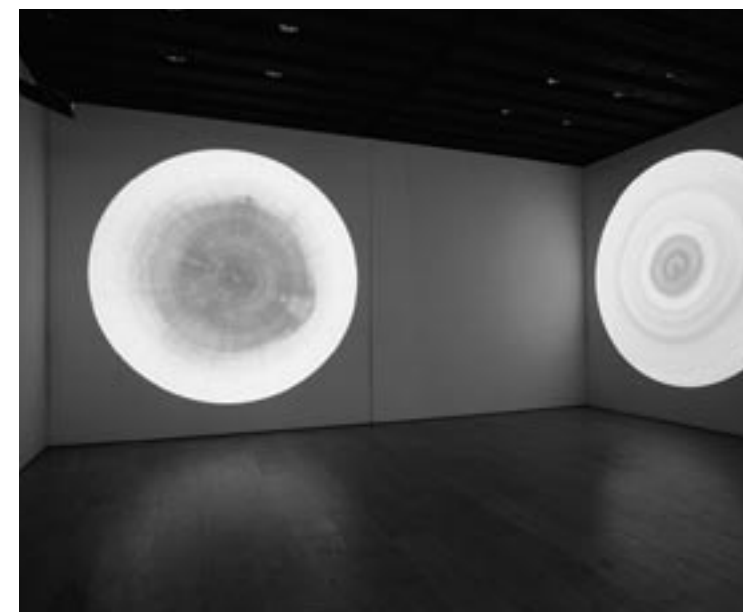
岩本あきかず Akikazu Iwamoto

1973 広島生まれ、1999 東北芸術工科大学卒業。1998～2005 ガーディアン ガーデン年末チャリティー企画参加(東京)、1999 西瓜糖・個展(東京)、2000 Karo Karo House・個展(東京)、2001 G.H gallery・個展(東京)、2002、2004 SPACE YUI・個展(東京)、2003 SPACE YUI(谷口広樹氏とのコラボレーションによる二人展)、2004 Michael Steinberg Fine Art gallery (N.Y) in polytechnicolor 展出品、2005 M.Y.ART PROSPECTS (N.Y) 他。グラフィックアート『3.3 ni』展入賞(4回)他。



小林和彦 Kazuhiko Kobayashi

1979 静岡県生まれ、2005 東北芸術工科大学大学院芸術工学研究科修了。2003 「デジタル・インターコネクション」町田市立国際版画美術館(東京)、2005 「scan Gate」新宿ニコソロン(東京)、「生まれるイメージ」山形美術館(山形)、現在、東北芸術工科大学情報デザイン学科助手。



橋本大佑 Daisuke Hashimoto

1977 年生まれ、東北芸術工科大学卒。2001 NHK BS 「デジスタ」ロードニー賞 & 伊藤有彦賞受賞、2001 UNITED CINEMA ANIMATION FESTIVAL 審査員特別賞受賞、2001 JAPAN DIGITAL ANIMATION FESTIVAL 入賞、2001 Forum des Images (パリ) 招待出展、2002 Impact Compact 2002 (ニューヨーク) 作品出展、2005 エジンバラ国際映画祭ミラーボール招待出展、2005 Resfest 2005 -Japan Toure Original プログラム RESMIX SHORTS 上映、2005 文化庁メディア芸術祭アニメーション部門優秀賞受賞、2006 Optronica (ロンドン) 招待出展、2006 onedotzero j-star (ロンドン) 招待出展。現在、映像ディレクターとして、P.I.C.S. 所属。



鈴木伸 Shin Suzuki

1982 東京都生まれ、2006 東北芸術工科大学美術科工芸コース金属工芸専攻卒業。2005 個展「SPATIAL ART」悠創館(山形)、個展「香澄町インスタレーション」山形建設株式会社倉庫内(山形)、2004 「CHOICE」小野画廊(銀座) 2005 「工芸問答」東北芸術工科大学(山形)、2006 「東北芸術工科大学卒業制作展」旧七蔵そば(山形)。現在、東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻在学中。

